

隠居が編集した江戸の贅沢 「いき」と「通」の道楽哲学

編集工学研究所所長 松岡正剛

EDO PERIOD LUXURY, EDITED BY THE RETIRED: DILETTANTISM OF IKI AND TSU

Seigo MATSUOKA, Director, Editorial Engineering Laboratory

The relationship between luxury and the capitalism, as indicated by Werner Sombart can be applied to Japan during the Edo Period. Shops dealing with luxury goods appeared in urban areas, and the "pseudo-parent-child relationship" like that between a shopkeeper and a clerk took root in various societies, while print media such as *ukiyo-zoshi* 浮世草子 (popular literature based on common people's lives in those days) and *saiken* 細見 (illustrated town guides) made *banzuke* 番付 or ranking of products and people's favorite things, which lead to the spread of extravagance among the people. Urban society in the Tokugawa Period was institutionally based on *bun* 分 (status, duties of respective persons, or sensibility), and it created a number of symbols, icons and items representing institutions (in the field of fashion, hair styles and accessories, for instance). Keeping within the framework of this institution—as in the Japanese expression “*bun wo wakimaeru* 分を弁える” (not forgetting what one’s role or duty is)—people took advantage of the institution; they indulged in every possible luxury and diversified those symbols. Furthermore, by linking luxury with their philosophy of life, people established the aesthetic sense of *iki* 粋 (Japanese chic) and *tsu* 通 (stylish person well informed on particular arts). The luxury accompanying such aesthetic senses was enjoyed by men rather than women. Such items as swords for samurai warriors, jackets for firemen, *haura* 羽裏 (inner back lining for the kimono, with patterns or pictures) for tradesmen and artisans, and *inro* 印籠 (pouch) were made for dandies (*otokomae* 男前). Especially *inkyos* 隠居, or retired persons who had stopped working early in their life after amassing a fortune, belonged to *ren* 連 (an amateur group of artists) of various fields from earlier days to train themselves to be a *tsu*, in order to devote themselves to their *doraku* 道楽 (dilettantism). Looking into the spread of luxury in the Edo Period from the aesthetic viewpoint, one main factor was that Japanese people traditionally had an aesthetic editing skill called *mitate* 見立て (likening to something else) and were therefore able to very flexibly create derivatives of various motifs, and it was retired people who were able to edit and generate new styles of sensitivities simultaneously incorporating two aesthetic senses, *ogori* おごり (beauty of extravagance) and *wabi* わび (beauty of simplicity and imperfection), which were factions of the former age. One of those new styles was *yatsushi* やつし (using but not seeming to use extravagant materials or the techniques of craftsmen). In those days luxuries of the dilettante class were complicated and profound, and those who didn’t understand the ambiguity or the multi senses of the dilettantes were labeled as *yabo* 野暮 (unrefined person) or *hankatsu* 半可通 (unskilled *tsu*). It was a period when people applied the philosophy of “*bun wo wakimaeru*” even to enjoying luxury.

ラクサスとは贅沢のことである。この言葉を表題にとりいれたヴェルナー・ゾンバルトの『恋愛と贅沢と資本主義』は、21世紀になってかえって光芒を放っている。

飾りのついた鏡、刺繍だらけのクッション、灰色の絹の靴下、コバルト色のペティコートといった、いまならどこにでもある贅沢品がフレンチ・ロココの波及を受けたドイツの街々に一斉に開花したとき、ゾンバルトはこれが資本主義の象徴的源泉だと確信したものだ。まさに今日にこそあてはまる。

ヨーロッパでは長らく奢侈は悪徳だった。ときに犯罪でもあった。それを解放させようとしたのはヴォルテールだった。これはおおざっぱにはフランス革命が宮廷の奢侈を市街に解放させたことと軌を一にする。イギリスでもエスクワイアとジェントルマンが人為的に形成されて、ロンドンの一角に「シティ」が出現したときに、贅沢は必ずしも敵視されなくなった。

ラ・ブリュイエルが「パリとは宮廷の開放的な模倣のことだ」とか、アルヒェンホルツが「ロンドンの2,000ポンド以上の収入者たちは、生活に200ポンドしか使わずに、残りの大半を享楽のために費やした」と書いたのは、そのことだ。つまり都市が変質し、贅沢が流出し、そして紳士淑女の恋愛が自由になったとき、ヨーロッパは贅沢を資本主義にとりこんだのである。

まったく同じことをおこしたのが、日本の徳川都市社会だった。ただしヨーロッパよりも早く、また速かった。ここではそういう日本独特の贅沢をめぐる感覚をとりあげたい。

贅沢が波及するには、それを用意したいくつかの装置や役割やしくみが先行する。日本でも同じことだ。まず、贅沢を展示した「店」の役割のことを書いておく。

信長と秀吉がやったことのひとつに兵農分離がある。それまで農兵であった者たちを「兵」と「農」に分離し、農村にくっついていた市場機能を段階的に都市部に移した。そしてそこに「商」をおこさせた。楽市楽座とはそのための施策である。

もともと日本の「市場」という言葉は「市庭」から派生した。寺社や農村の庭が流通市場だった。古代日本の庭には神庭・斎庭・市庭の3つがあるのだが、そのひとつの市庭が寺社から農村に発展していった。それを信長たちは都市部に移した。そうすると何がおこるかという、商人たちが売る品物の置き場に困った。町中には寺社や農村のような広い場所がない。そこで、商人たちは「棚」を工夫した。この棚が「店」に発展し、店舗にさまざまな生活用品が並びきったとき、そのあとに奢侈と贅沢の第一歩が踏み出されたのである。

次に、贅沢を広めたプロデューサーが何人もいたことを指摘しておきたい。いわゆる仕掛け人だ。

江戸社会の潤いが金銀鉱山の採掘の成功によっていたことはよく知られているが、これを促進し、組み立てたのは大久保長安だった。長安は武田家に仕えていた者で、父親は猿楽役者だった。その長安が家康にスカウトされて異能を発揮した。もともと家康は、秀忠に將軍を譲って駿府に退いてからが凄かった。政策政局のダブル・スタンダードに着手して、そのために駿府に異能者たちを呼び寄せた。わかりやすくいえば戦国大名が抱えていた才能を関ヶ原以降にまるごとM&Aしたようなもので、そのとき武田の家臣もごっそり抜かれた。そこに長安がいた。

抜擢された長安は、早々に五街道のインフラ整備と佐渡や石見の鉱山開発をまかされた。特別の開発隊を組むことにした。長安は八王子代官だった経験をいかして、千人同心という組織を発想した。これを各地域にふやそうというのだ。このとき、長安は「寄親・寄子」という日本人独特の紐帯を活用することにした。日本の大きなプロジェクトには"仮の親"が必要だと見抜いたのである。

なぜ"仮の親"が必要なのか。そのことを説明するためにも、ここでもう一人のプロデューサーを紹介しておきたい。吉原に遊郭をつくった庄司甚左衛門だ。遊女が江戸時代の華麗な贅沢を身をもって体現していたことはいうまでもないが、その遊郭を幕府に承認させて夜なお贅沢三昧の不夜城の伝統をつくったのが、甚左衛門である。

詳しいことは省くけれど、甚左衛門の狙いは冴えていた。第1に幕府の中央集権にもとついて「遊び」の社会を用意すること、第2にその社会（遊郭・遊里）は独自のルールをもつこと、第3に寄親・寄子の仕組みをまねること、この三つだ。第2の狙いは「花魁・太夫・格子・端」などの役柄と「ありんす言葉」などに生かされ、第3の狙いは遊郭にかかわる者すべてに"仮の親"をつけることで成功した。

これはその後、商家の丁稚奉公システムや長屋の大家と店子の関係にまで生かされた。この関係意識は、のちに宝暦・天明時代に大流行した「連」のしくみにまで生かされる。

もうひとつ、近世日本の贅沢を準備したものにメディアがある。ここでいうメディアは主として「冊子もの」のことで、江戸・大坂・京都の地本問屋がしまくった浮世草子やのちの洒落本・黄表紙のたぐいのメディアと、メディア・プロデューサーとして鳴らした葛屋重三郎がそうであったように、「細見」というタウンガイドふうのものと浮世絵とをセットにしたメディアがあった。

まとめていえば浮世絵を含めた情報メディアが圧倒的な量で徳川都市社会に出回った。これが贅沢の底辺を広げていったのだ。レイアウト（割付）も工夫され、コピー（文案）も挿絵（錦絵や木版線画）も特段だった。とくに注目すべきはこれらのメディアが「番付」を乱打したことである。美人の番付から着物の柄の番付まで、酒の番付から和算の競争まで、趣向や趣味を徹底してランキングした。

これは今日のグーグル社会がすべての情報をページランクで組み立て表示していることに似て、一方では欲望と情報の結びつきを強化し、他方でじりじりと贅沢の基準を底上げしていった。

ともかくもこのように「棚」と「店」と「冊子」が準備され、そこに"仮の親"の管轄があり、「商」が思い切った"売り"ができ、その商品が浮世絵や番付によって巷間に広まっていくようになったとき、徳川期の"贅沢の資本主義"が発芽したのである。

しかし、ゾンバルトのように徳川期の"贅沢の資本主義"を浮き彫りにさせるには、もっといくつものファクターやフィルターが同時に動いたことを説明しなければならない。

贅沢の感覚が公家と武家とに分かれた趣向になって競いあったこと、「冊子もの」とともに浮世床や浮世風呂といった噂のコミュニティが町人文化に浸透していったこと、そのなかで目立った「道楽」や「通人」が生まれていったこと、それが「粹」や「伊達」や「野暮」といった極端な価値観にまで進ん

でいったことなど、検討すべきことは少なくない。これらのさまざまな組み合わせを説明する必要がある。

また、もう少し大きな動向にも目を向けなければならない。鎖国や幕府の取り締まりの厳しさについて、江戸・京都・大坂の三都が比較された経緯について、人口増殖と人口移動について、遊郭と芝居小屋とが並び称されて「悪所^{あくしょ}」が繁栄したことについて、木綿や砂糖などの国産品の急速な波及について、染めや木工や金工の技術が細分化されたことについて等々、あれこれ述べる必要がある。

が、いまはそれらを省いて説明すると、総じて身分社会が極端なほどに鮮明になったことが大きなエンジンになったのだと思われる。

徳川都市社会の基本になったものは「分^{ぶん}」である。身分をあらわす「分」であり、自分・本分・気分・処分・分担であって、「分を弁^{わきま}える」という分別でも、分家や暖簾分けの「分」でもある。

これは封建社会の桎梏^{くびき}や頸^{くびき}となったもので、一方では人々を縛るものでもあったが、他方、その「分」を象徴するための過剰なほどのシンボルやアイコンやアイテムをつくりあげた。

たとえば髪形、たとえば帯、たとえば印籠^{ねつげ}や根付、たとえば絵馬や看板、たとえば朝顔だ。これらが「店」と「棚」と「冊子」を飾り、人々をそうとうに煽った。

髪形を例にとると、これは正確には髻^{まげ}というのだが、いまでも有名な島田髻だけでも文金島田・投げ島田・メ島田・やつし島田・奴島田・かしまや島田・腰折島田など十数種が流行し、御所髻や勝山髻や遊女^{たてひょうご}の立兵庫などととも、身分にともなう女心^{くすく}を櫛^{くすく}った。文金高島田などは八代将軍吉宗の小判改鋳に呼応したもので、元文と金貨小判の2文字をとって文金による値上がり^{値上がり}と髻の根上^{根上}がり^{根上}りをかけたもの、そういう洒落が流行を生んだものだった。

髪形は一目で武家か商家か、ミスかミセスかが見分けられるものだが、それだけではなく髪^{こうがい}にさす^{さす} 笄^{かんざし}、櫛^{かんざし}、簪^{かんざし}によっても見分けがついた。そうになると、それらの材料や細工に多様性があらわれ、竈甲・象牙・金・銀・ガラスが贅^{ぜい}を競い、そこに蒔絵や透かし彫りや型染めが加わっていったのである。

こうしたシンボル・アイコン・アイテムの多様化こそ、江戸の贅^{ぜい}沢に驚くべきレパートリーが登場した要因で、それはもともとは「分」を明瞭にするという徳川社会の政策を反映しつつも、それを商家や町人たちがみごとに逆用していった創意工夫の賜物だった。

では、このような多様なシンボル・アイコン・アイテムがいつごろから巷に溢れだしたかといえば、やはり元禄期からだった。

多様性を当初に開陳させてみたのは、日本橋駿河町に越後屋を開いた三井高利だったろう。越後屋はそれまでの呉服商が見世物売り（得意先をまわってあとで品物を届ける）と屋敷売り（客の好みを想定して先方に持っていく）だけだったのを、店先売りにしたこと、正札によって商売をしたこと、引札^{ひきふだ}を発案したことなど、高利はさまざまなアイデアを繰り出したけれど、実は「店」を開いたこととアイテム数を一挙にふやしたことにこそ、のちの「贅^{ぜい}沢の資本主義」を準備した先取り^{先取り}がうかがえる。眉墨・頬紅などの首から上だけの商品アイテムで19種も用意した。

越後屋が試みたような元禄期の贅の発露は、ただちに井原西鶴や浮世草子の文筆家によって巷間に流布された。メディアエーションされた。とくに先頭を切った西鶴の文章は、平成バブルの予兆となった田中康夫の『なんとなくクリスタル』などちがって、アイテムを並べておもしろがっただけでなく、そこに人情や世俗哲学や商業感覚を深彫りするものだったため、同じ夕霧太夫を扱った近松門左衛門がそこに義理を読みこんだことにあらわれたように、贅沢をどのような人生模様^{まよう}に織り込むかという議論や論争を呼びおこし、それがあげくは「人情と義理」の、「粹と野暮」の、あるいは「勇み」と「鉄火」と「いなせ」の、さらには「いき」と「はり」の、それぞれの"通り相場"を用意したのである。

このことは重要だ。なぜなら、この美意識の"通り相場"の分別こそ、やがて宝暦・天明の宝天時代では「通^{つう}」と称ばれる趣向になったからである。また数々の「道楽」の齒車となったからである。

江戸の贅沢が「通」として確立していったことは、いまさら言うまでもないだろう。ただし、そのことを理解するには、アイテムの多様性が女性ものにかぎらず、むしろ男物の領域で、いわゆる「男前」のために用意されたアイテムこそが贅のかぎりを尽くしたことに注目する必要がある。

旗本の刀の拵^{こしら}え、町奴が好んだ紋章、「かぶきもの」たちの大袈裟な衣裳、火消しの纏^{まとい}や火事羽織、印籠や根付の数々、商人や町人が隠れて贅をたのしんだ羽織の裏模様まで、男前のために開発されたアイテムは数多い。とくに強調しておきたいのは隠居の美学が広まったことだ。

今日では隠居という言葉は消極的なニュアンスをもつが、当時の隠居はかなりラディカルだった。明治の三井をつくりあげた益田鈍翁の隠居すら40代であったことを思えば想定がつくように、江戸時代の隠居は30代後半から40代半ばで決断され、それ以降は「隠居分」という財産割り当てを費^{つか}って好き放題をする計画に入っていた。これをしばしば「楽隠居」といった。楽隠居をするには、それまでに身代^{しんだい}を築きあげておかなくてはならない。

家賃収入や金利で悠々自適をする隠居は「仕舞うた屋」とよばれた。武家の隠居もかなり流行し、こちらは文芸や学芸に遊ぶことが好まれた。いずれにしても元気なうちに隠居する者の数が多かったことは、徳川社会のもうひとつのエネルギーとなった。ぎりぎりまで会社に勤めてその後は高齢化に悩む今日の日本社会とはかなり様相が異なっている。

このような隠居者たちが向かったものを、総称して「道楽」（もっと広くいえば遊芸）という。また、そのための準備や稽古をしておくことを「通じておく」と言った。すなわち「通」になることを稽古するべく、さまざまな「連」に与し、俳諧や俗曲や川柳や狂歌に、また朝顔や金魚や小鳥や花卉に通じておくのだ。この通人としての前哨戦をおえ、隠居の身分がやってくる。そうなれば羽織の裏に凝るどころか、家構えから調度品まで、吉原での遊興から伊勢参りまで、さまざまな贅を尽くすことになる。

いったい、このようにして広まっていった江戸の道楽贅沢はなぜ急速に広まったのだろうか。

そもそも日本の美意識は「面影」を求めるといふ方向に発達してきた。面影とは、そこに必ずしも現在していなくともかまわない不変の価値を賞美するために想定されたイメージで、かつては神々の面影

や仏の諸相の面影が重視された。歌枕などもそうした不変の面影のためにつくられた。田子の浦といえど富士が、宇治といえど川霧が、竜田川といえど紅葉が、たとえどんな季節であろうと想定されたのだ。

中世、それらがしだいに現実のもろもろの物品や立ち木や衣裳の柄にも想定されるようになった。何でもよかった。これを「見立て」というのだが、こうして面影が何かに見立てられるということになると、庭石の並び方に釈迦三尊が、柳の枝ぶりに橋姫が、鬘の形に箏の名曲が見立てられることになり、これが庭園や屏風や調度などを、また能装束や絵巻物のバラエティを次々につくりだしていった。見立ては日本人の美意識が変幻自在に動いていくためのすこぶる有効な編集方法となったのだ。

しかし室町期、ここから美の感覚が大きく二つに分かれていく。ひとつは北山金閣に代表される「おごり」の美、もうひとつは東山銀閣の「わび」の美であった。けれども、この二つは対立したわけではない。つねに両方が対応し、照応するように進んだ。日本の面影は二つに揺れながら伝承されるようになったのである。これをのちのち歌舞伎用語でいえば「荒事と和事」とみなせばいいだろう。

江戸時代、「おごり」と「わび」はみごとに対応しつつ鍛えられていく。たとえば小堀遠州の「綺麗さび」などは日光東照宮ふうの「おごりの美」にも桂離宮ふうの「わびの美」にも通じた。寂びていながら綺麗なのである。たんに綺麗なのではなく、どこか寂びているのだ。

こうして江戸時代の日本人は、しだいに二項同体の美意識に強くなっていった。すでに述べた「粋」「はり」「勇み」なども、このような一見相反する義理と人情を、華麗と簡素を、気に二項同体してみせる感覚から生まれてきたものである。これらは多く、隠居たちの編集能力によっていた。

江戸の道楽贅沢の数々を見ていると、すぐに気がつくことがある。ひとつはそこには必ず面影が追慕されているということだ。これは茶碗や浮世絵や友禅や扇絵などを見ればすぐわかるだろう。

もうひとつは、荒事と和事のどちらにも、「おごり」と「わび」のどちらにも転べる楽しみをしていたということだ。過剰にも控えめにもなった。足し算にも引き算にもなったのだ。

この感覚を理解するのはちょっと難しいかもしれないが、「やつし」という感覚をそのあいだにおいてみると、かなりわかりやすくなる。「やつし」とは本当はかなり贅沢な素材や職人の技を使っているのだが、それがそのように見えないようにすることをいう。それが転じて、実はお金持ちなのに質素にすることを言ったり、けっこう贅沢な品なのにあえて「粗品」と言いあらわすというプレゼンテーションのことを言ったりするようになった。

別の視点で説明すれば、日本語の「結構」とか「加減」という言葉の使いかたにその意図があらわれている。結構には「たいへん結構なものだ」というプラスの意味と、「もう結構だ」というマイナスの意味がある。加減にも「いい湯加減です」と「いい加減な連中だ」という意味がある。これらは文脈で使い分けられた。それと同様のことが美意識でも錬磨されたのだ。そう、思えばいいだろう。

いずれにしても江戸の道楽贅沢は、幅の広く奥行も深くてなかなか複雑なのである。一筋縄では見えてはこない。けれどもその複雑な好みかたこそが、江戸の道楽贅沢を支えてきた感覚だった。もしも、その好みの両義性や多義性がわからなければ、それはたちどころに野暮とか半可通として退けられた。

贅沢にも「分を弁える」という哲学が貫かれた時代だったのである。

松岡正剛（まつおかせいごう）

1944年、京都生まれ。早稲田大学出身、編集工学研究所所長、ISIS編集学校校長。情報文化と情報技術をつなぐ研究開発に多数携わる。日本文化研究の第一人者でもある。おもな著書に『日本流』『知の編集工学』『遊学』『花鳥風月の科学』『フラジャイル』『ルナティック』『空海の夢』『山水思想』『松岡正剛千夜千冊』（全七巻）『日本という方法』『17歳のための世界と日本の見方』ほか多数。「松岡正剛の千夜千冊」更新中（<http://www.isis.ne.jp/isis/>）。

（※肩書は掲載時のものです。）